

第7章 入学から現在までの意識・行動

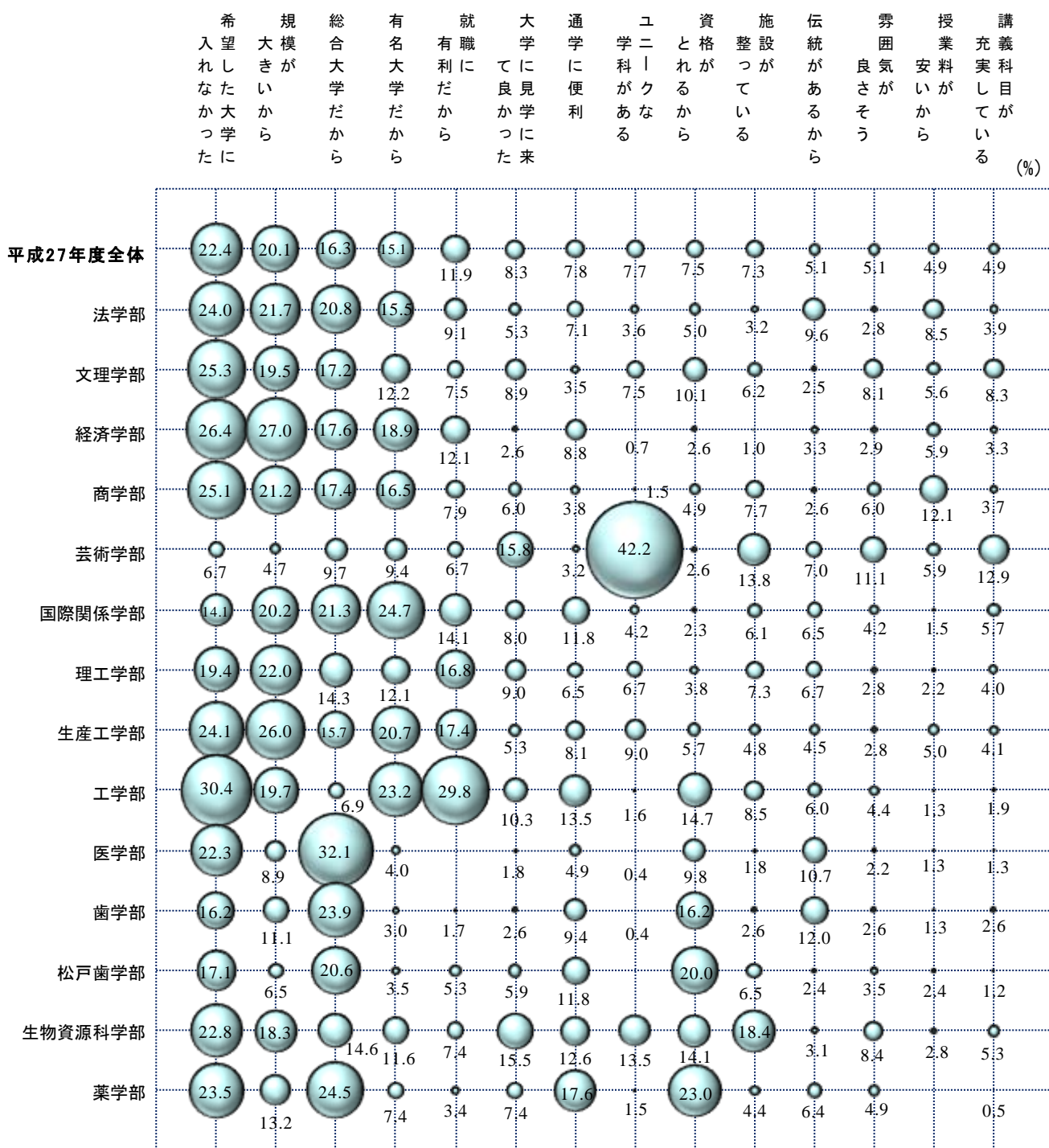
1. 入学決心理由

14学部88学科などを擁する国内有数の総合大学であることや知名度が入学理由の上位。芸術学部は「ユニークな学科があるから」が断トツ，工学系学部は「就職に有利」が高い。

本学に入学する決心をした主な理由を，全体での高い順に並べたものが下図です。全体では，「希望した大学に入れなかったから」と消極的な理由が22.4%で最も高くなっています。次いで「規模が大きから」（20.1%），「総合大学だから」（16.3%），「有名大学だから」（15.1%）と国内最大級の総合大学であることや知名度が入学決心理由の上位に挙げられています。

学部別に見ると，芸術学部で「ユニークな学科があるから」が断トツ（42.2%），工学系学部で「就職に有利だから」（16.8%～29.8%），生物資源科学部で「施設が整っているから」（18.4%）が相対的に高くなっています。

図7-1 入学決心理由(平成27年度全体・学部別)

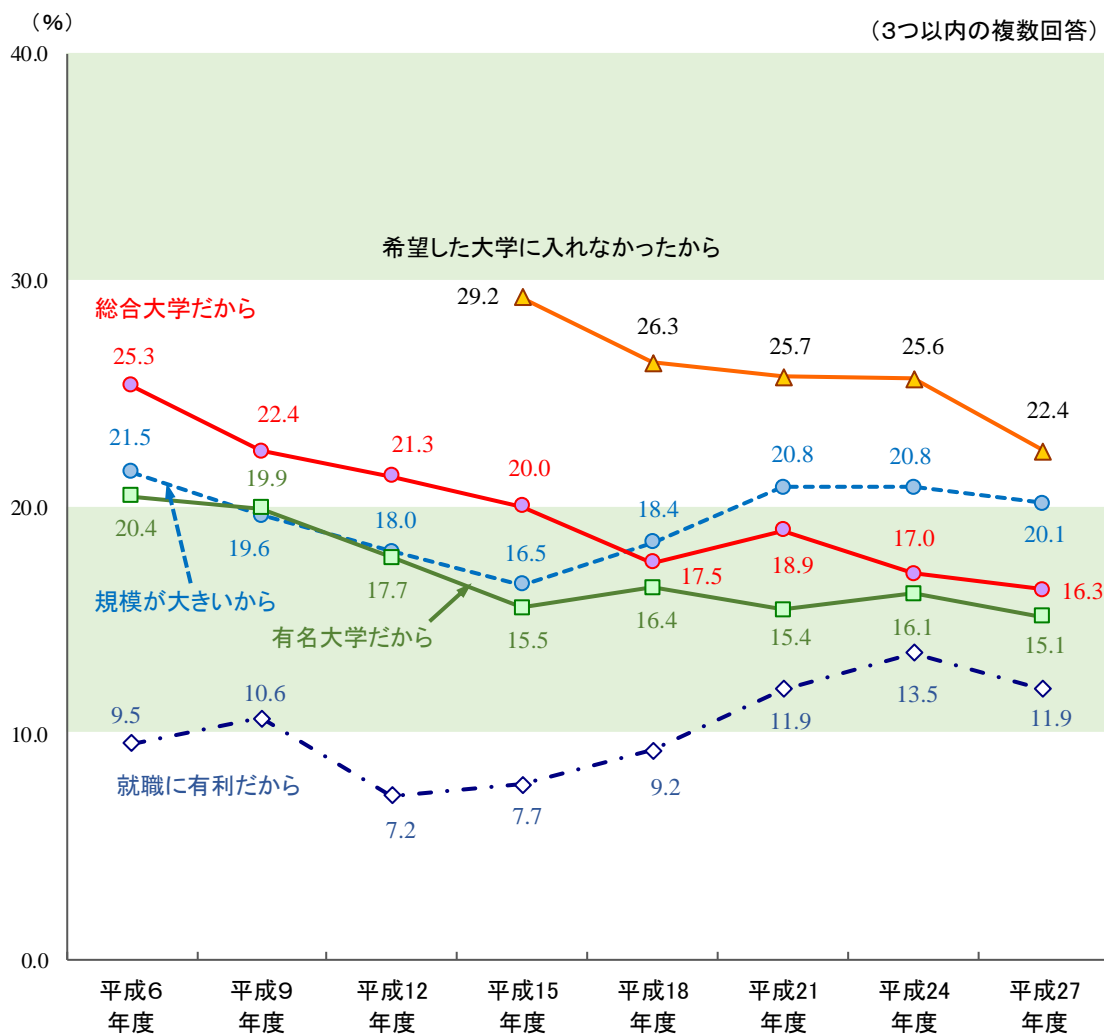


2. 入学決心理由－今回上位5項目の経年変化

「希望した大学に入れなかったから」入学した学生は12年前より6.8ポイント減少。
学部の魅力度アップと入試制度の多様化を反映？

本学に入学する決心をした理由のうち上位5項目までの経年変化を見ると、「希望した大学に入れなかったから」は調査項目に含まれた平成15年度の29.2%から漸減傾向にあり12年間で6.8ポイント減少、直近の3年間でも3.2ポイント減少しています。商学部・国際関係学部・文理学部では直近の3年間で約10ポイントと減少幅が大きくなっています。この傾向は各学部の魅力が強まったことに加えて、推薦・AO入試枠を増やすなど本学の入試制度の多様化に関係しているかもしれません。「総合大学だから」は平成6年度は25.3%と入学決心理由のトップでしたが、漸減傾向にあり、21年間で9.0ポイント減少しています。「就職に有利だから」は平成12年度から増加傾向を示していましたが、直近の3年間では1.6ポイント減少しています。

図7-2 入学決心理由(平成27年度上位5項目の経年変化・全体)

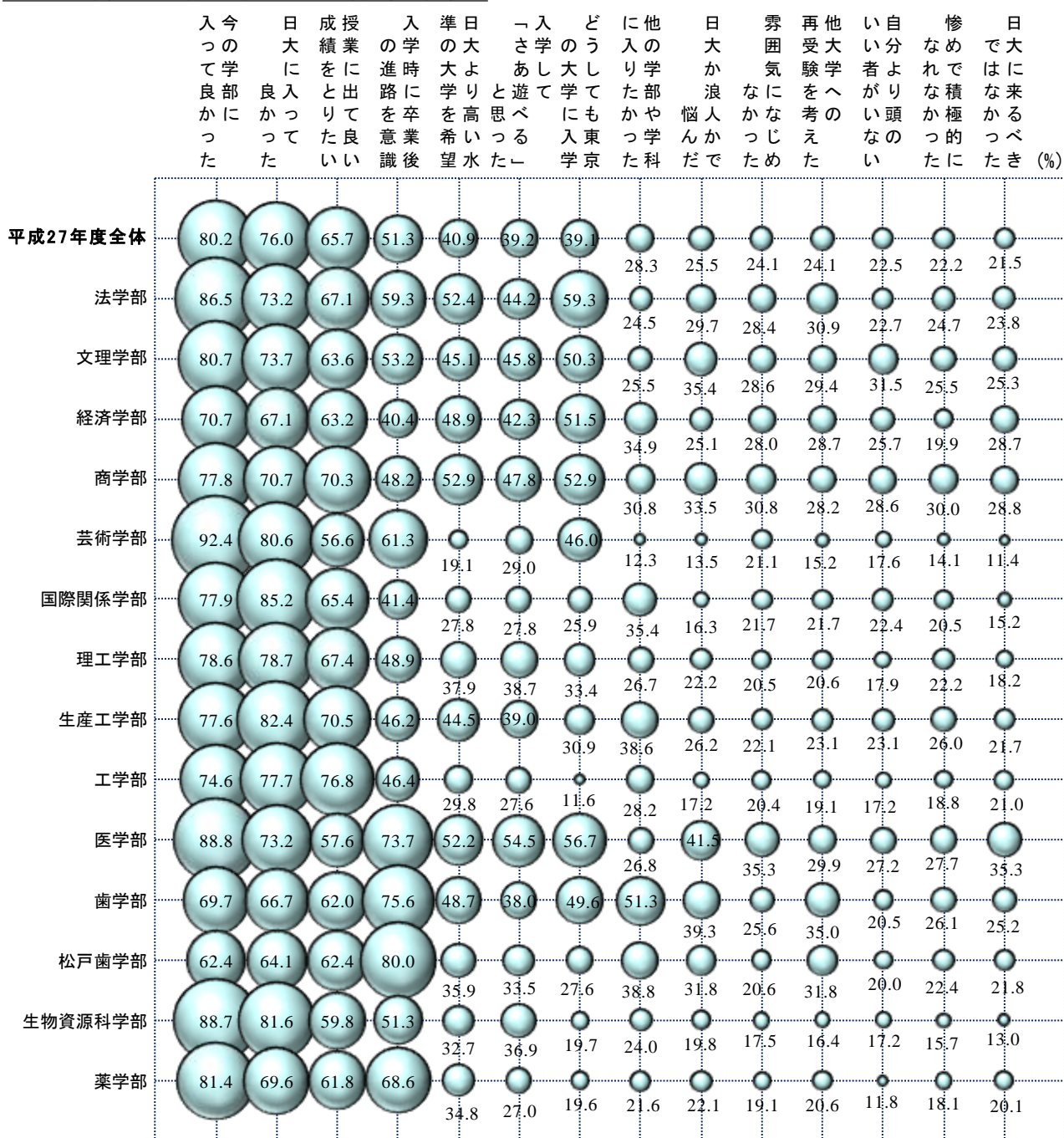


3.入学直後の意識・行動

入学直後、今の学部に入学したことに満足していた学生は8割。
一方で日大入学が不本意だった学生も。

入学直後の意識・行動について全体で高い順に並べたものが下図です。全体では「今の学部に入って良かった」が80.2%、「日大に入って良かった」が76.0%と高くなっており、大半の学生が本学入学に関して満足していることが分かります。「できるだけ多くの授業に出て良い成績をとろうと思った」と積極的な勉学意識を抱いた学生が65.7%と3番目に高くなっています。その一方で、「日大か浪人かで悩んだ」「他大学への再受験を考えた」など入学に不本意な意識を抱いていた学生も20%強ずついます。芸術学部・医学部・生物資源科学部では「今の学部に入って良かった」が90%前後と入学直後の満足感が高くなっています。また、医歯系学部では「入学時に卒業後の進路・就職をすでに意識していた」学生が74%～80%と高い点が目立っています。

図7-3 入学直後の意識・行動(平成27年度全体・学部別)



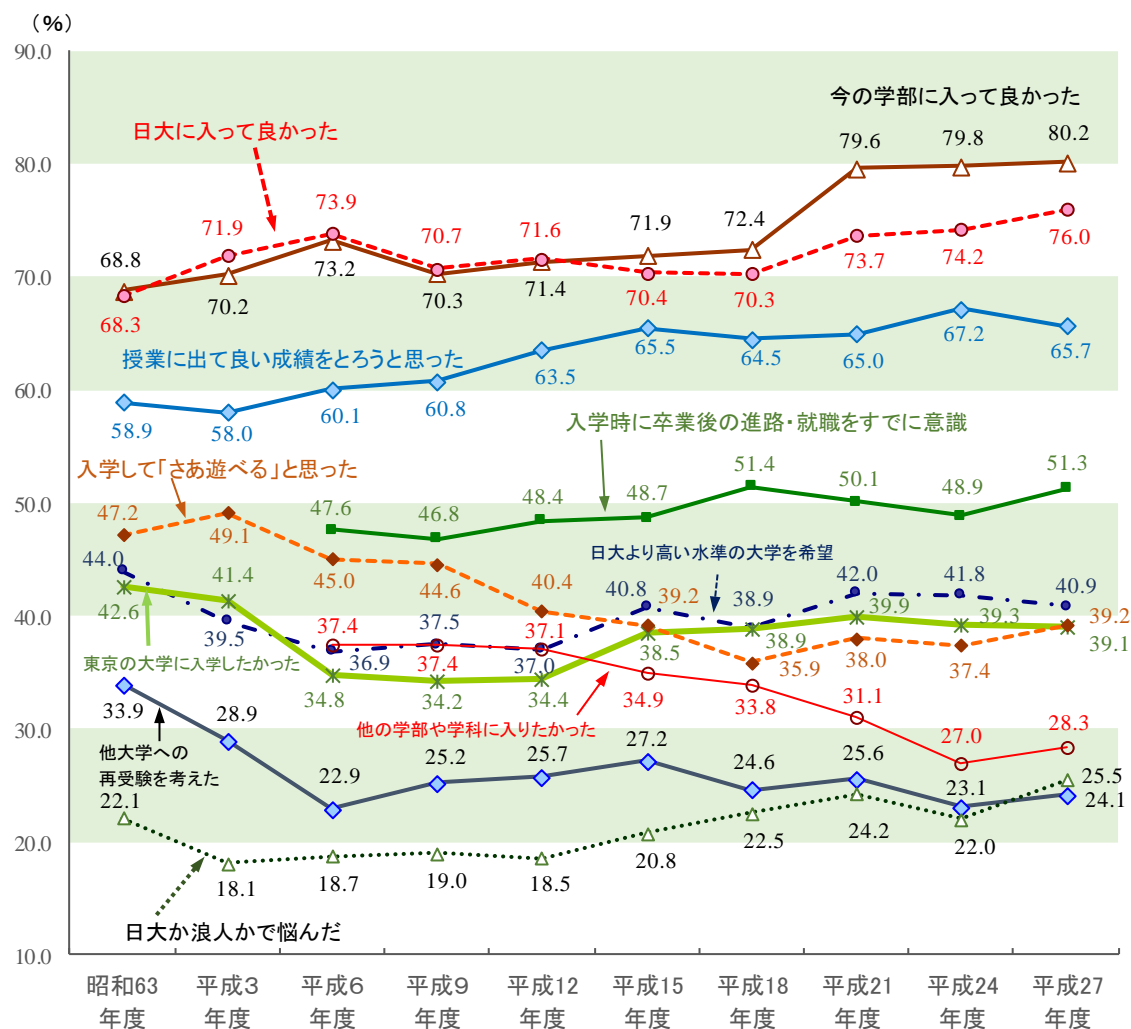
4.入学直後の意識・行動—主なものの経年変化

入学直後の学部や本学に対する満足感は年々高まる傾向が続く。「多くの授業に出て良い成績をとろうと思った」学生の比率も高水準をキープ。

入学直後の意識・行動について昭和63年度（27年前）からの経年変化を見ると、「今の学部に入って良かった」が68.8%から80.2%と11.4ポイント増、「日大に入って良かった」が68.3%から76.0%と7.7ポイント増となっており、入学直後の学部・本学に対する満足感は年々高まる傾向にあることが分かります（生産工学部・生物資源科学部・工学部では「今の学部に入って良かった」が約20ポイント増）。また、「できるだけ多くの授業に出て良い成績をとろうと思った」は平成15年度以降約65%のレベルで推移しており、入学直後から勉学意識の高い学生が多いことが分かります（医学部・歯学部ではこの12年間で11ポイント増）。さらに、「入学時に卒業後の進路・就職をすでに意識していた」は平成18年度以降50%前後で推移し、直近の3年間では2.4ポイント増となっています（工学部では7.9ポイント増）。

消極的な意識・行動について見ると、「他大学への再受験を考えた」は平成18年度以降25%前後で横這いですが、「日大か浪人かで悩んだ」は平成12年度以降概ね漸増傾向となっており15年間で7.0ポイント増加しています（医学部・文理学部・松戸歯学部で両意識の増加傾向が強い）。

図7-4 入学直後の意識・行動—主なものの経年変化(全体)



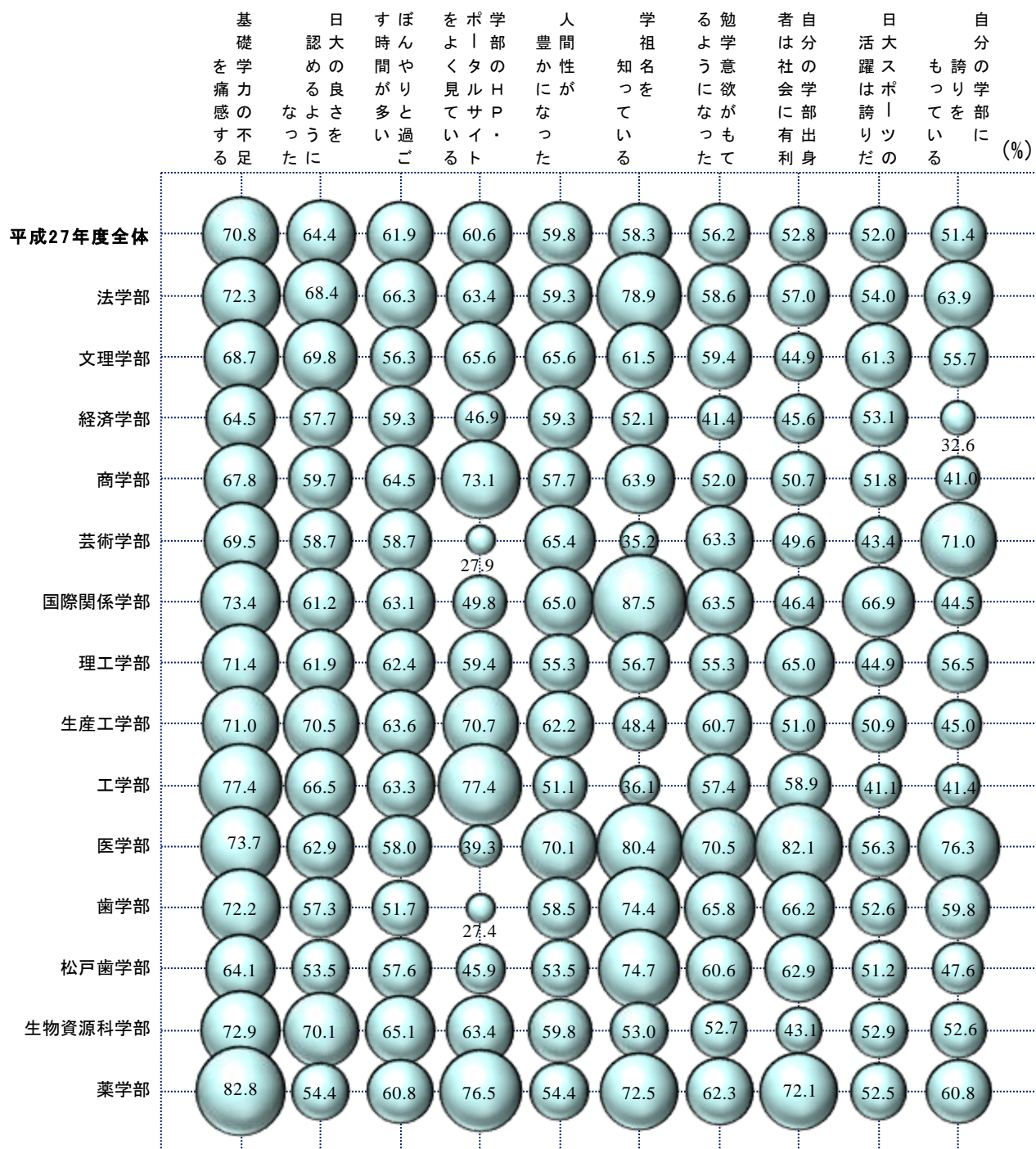
5.現在の意識・行動(上位10項目)

「基礎学力の不足を痛感」している学生が70.8%。全学部で高い傾向。「人間性が豊かになった」「勉学意欲がもてるようになった」など積極的評価が各過半数。

学生の現在の意識・行動について全体で高い順に上位10項目をピックアップしたものが下図です。

全体では「基礎学力の不足を痛感する」が70.8%でトップ、「入学直後に比べると日大の良さを認めるようになった」(64.4%)が続いています。「人間性が豊かになった」(59.8%),「勉学意欲がもてるようになった」(56.2%),「自分の学部に誇りをもっている」(51.4%)と積極的な意識や態度を示す学生がそれぞれ過半数となっています。「基礎学力の不足を痛感する」学生は、薬学部・工学部で80%前後、他の学部でも64%~74%と全学部で高い傾向が見られます。一方、「学部のホームページ・ポータルサイトをよく見ている」「学祖名を知っている」は学部によるバラつきが大きくなっています。

図7-5-1 現在の意識・行動-上位10項目(平成27年度全体・学部別)



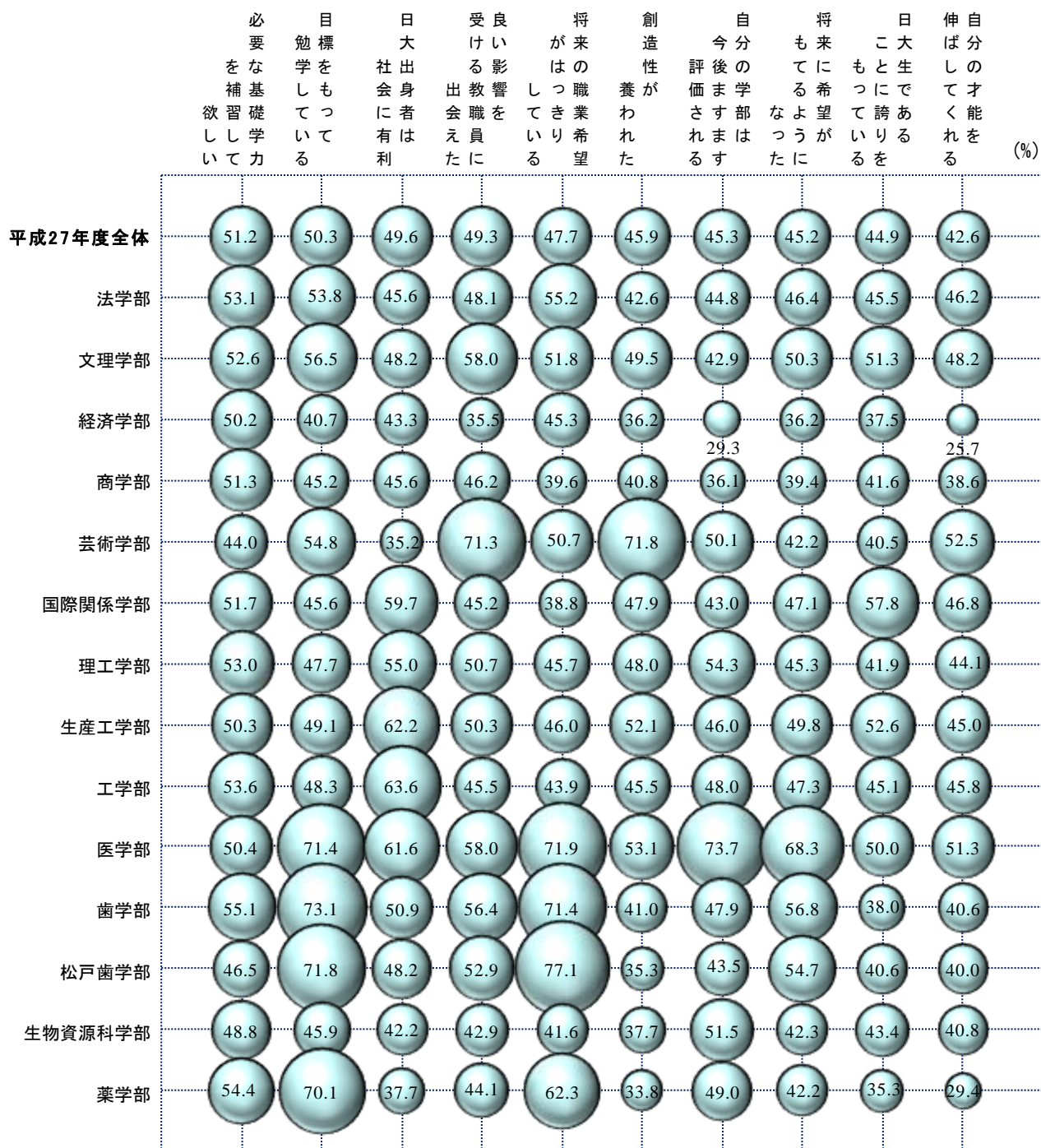
5.現在の意識・行動(中位10項目)

基礎学力補習を望む声は全学部共通, 「目標をもって勉学」「職業希望がはっきり」は医歯系学部, 「創造性」は芸術学部で高い。「創造性」「学部の今後の評価」は学部間のバラつき大。

学生の現在の意識・行動について上位11~20位までを表示したものが下図です。

「必要な基礎学力を補習して欲しい」が全体で51.2%と高く, 芸術学部の44.0%から歯学部の55.1%まで学部間のバラつきも小さく, 本学生共通の要望であることが分かります。「目標をもって勉学している」と「将来の職業希望がはっきりしている」は医歯系学部で70%台, 「良い影響を受ける教職員に出会えた」「創造性が養われた」は芸術学部で70%強と目立って高くなっています。「創造性が養われた」と「自分の学部は今後ますます評価される」は, 学部により評価のバラつきが大きくなっています。

図7-5-2 現在の意識・行動-中位10項目(平成27年度全体・学部別)



5.現在の意識・行動(下位13項目)

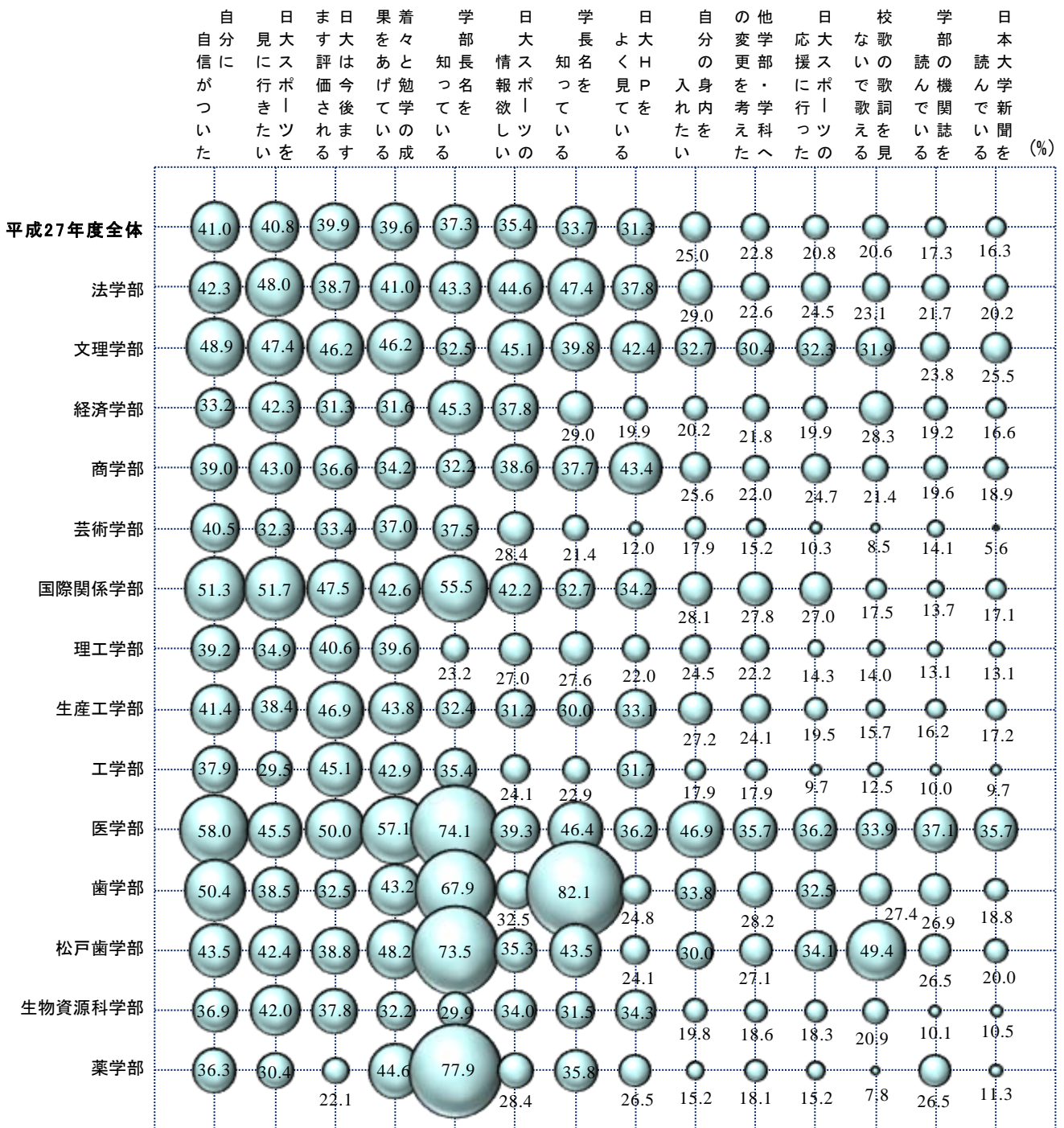
入学後「自分に自信がついた」学生は、医学部・国際関係学部・歯学部で50%台。「他学部・学科への変更」といった本学の規模のメリットを活かした意識・行動も20%強。

学生の現在の意識・行動について21～33位までを表示したものが下図です。

「自分に自信がついた」学生は全体で41.0%、医学部・国際関係学部・歯学部で50%台と高くなっています。「学部長名を知っている」は理工学部の23.2%から薬学部の77.9%まで、「学長名を知っている」も芸術学部の21.4%から歯学部の82.1%まで学部間のバラつきが大きい点が目立ちます。「他学部・学科への変更を考えた」※は22.8%となっており(芸術学部の15.2%から医学部の35.7%まで学部間のバラつきは小さめ)、本学の規模のメリットを活かした行動を意識した学生も少なくないようです。

※平成27年度から調査項目に加えた。

図7-5-3 現在の意識・行動-下位13項目(平成27年度全体・学部別)

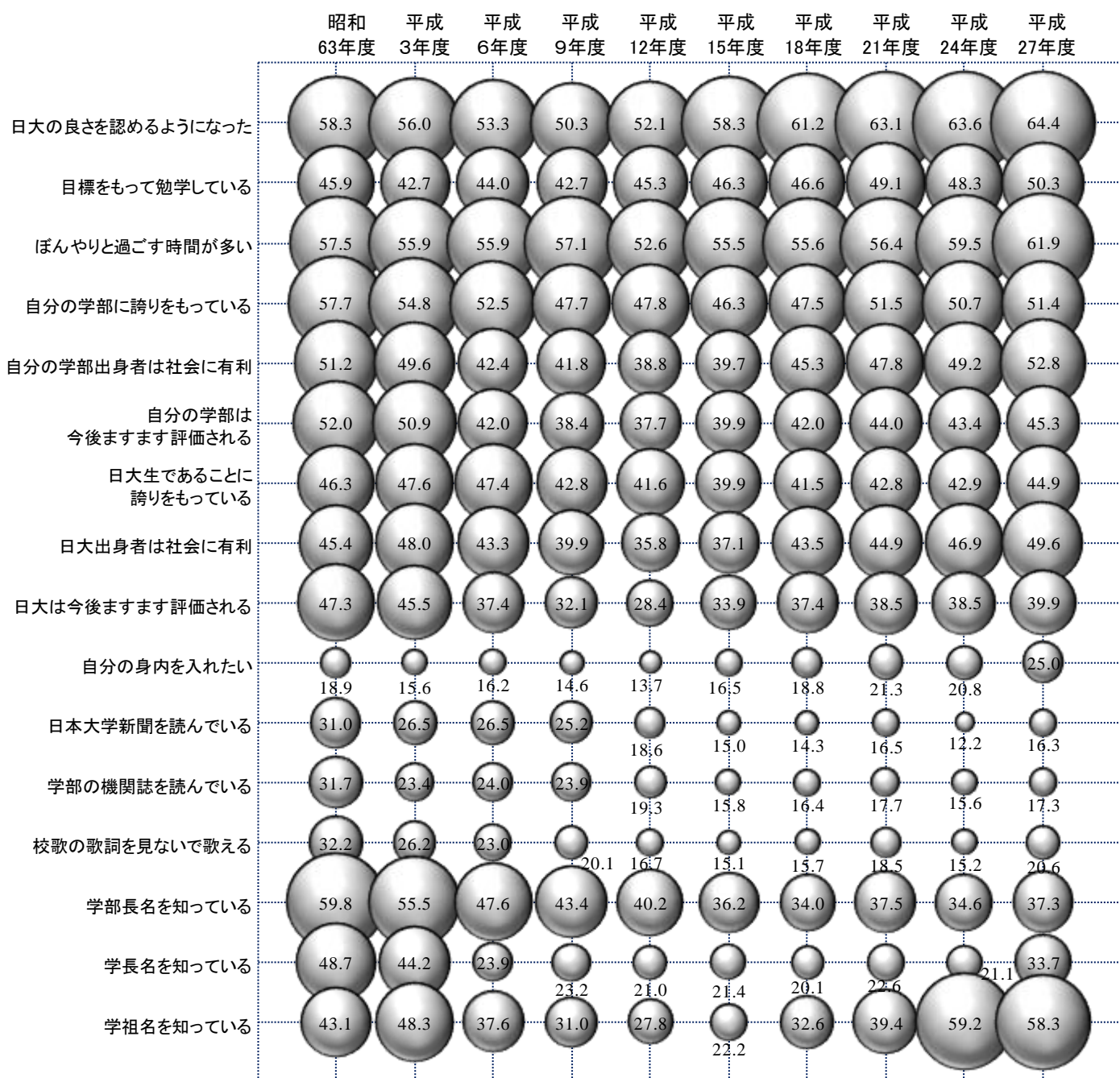


6.現在の意識・行動の経年変化

「目標をもって勉学」する学生、「日大の良さを認める」学生は18年前から増加傾向。約15年前から日大帰属意識が高まる傾向、「自分の学部は社会に出てから有利」も。

第1回調査（昭和63年）から継続している調査項目について、現在の意識・行動の経年変化を見ると、「目標をもって勉学している」学生が、平成9年度の42.7%から概ね年々増加し18年間で7.6ポイント増加しています。「日大の良さを認めるようになった」は平成9年度から平成27年度の18年間で14.1ポイント、「日大出身者は社会に出てから有利」「日大は今後ますます評価される」「自分の身内を日大に入れたい」も平成12年度から15年間で10数ポイント増加しており、日大帰属意識が高まっています。「自分の学部出身者は社会に出てから有利」も15年間で14.0ポイント増加しており、学部帰属意識も高まる傾向が見られます。

図7-6 現在の意識・行動の経年変化(全体)



7.現在の意識・行動の経年変化－3年前との比較

3年前と比較して、学長名の認知率と学部のWeb情報の利用が急増。
文理学部は情報取得に関する項目や「勉学の成果」等10項目で大幅増加。

現在の意識・行動についての回答率を3年前と比較したものが下表です。

直近の3年間で大きく増加したのは「学長（総長）名を知っている」で、直近の3年間に12.6ポイントと大きく増加しています。これは、平成25年4月に総長制から学長制に移行したこと、大学帰属意識の高まり、本学及び学部のホームページ閲覧の浸透などによるものと推測されます。学部別では、平成24年度に20%前後と認知率が低かった学部（法学部・文理学部・生物資源科学部・薬学部等）で20ポイント前後増加しています。「自分の学部のホームページ・ポータルサイトをよく見ている」学生も、平成24年度から12.6ポイント増加し60.6%になっています。この増加は、学生に対して学部内ポータルサイトを使って授業情報などの情報を伝達するシステムが急速に浸透していることを反映しているものと思われます。商学部・文理学部・生産工学部・工学部では20ポイント以上増加しています。

また、文理学部では「日本大学新聞」「学部の機関紙」といった紙媒体の閲読、「将来に希望」「着々と勉学の成果をあげている」等10項目で3年前より10ポイント以上増加しています。

表7-7 現在の意識・行動の経年変化－3年前との比較（学部別）

	H27 年度	前回 差	白字 ……10ポイント以上増加					黒字 ……10ポイント以上減少					<増減ポイント>		
			法	文理	経済	商	芸術	国際 関係	理工	生産 工	医	歯		松戸 歯	生物 資源
日大の良さを認めるようになった	64.4%	0.8				6.7						6.2		5.3	-6.7
勉学意欲がもてるようになった	56.2%	0.5				10.1	-5.8							9.4	-5.9
将来に希望がもてるようになった	45.2%	3.6	6.3	10.0								6.5			-7.2
自分に自信がついた	41.0%	1.6		7.2	-6.4					5.1				7.3	
人間性が豊かになった	59.8%	-2.0										-5.8	7.0	-7.7	-7.3
着々と勉学の成果をあげている	39.6%	2.5		12.4										8.9	-5.0
創造性が養われた	45.9%	1.0		6.3									6.6		6.7
基礎学力の不足を痛感する	70.8%	-3.2		-7.3										5.6	5.5
必要な基礎学力を補習して欲しい	51.2%	-0.8	7.5		-5.4					-5.5			-5.4	-6.2	5.5
目標をもって勉学している	50.3%	2.0		7.2										8.8	7.6
将来の職業希望がはっきりしている	47.7%	1.0			5.7										-8.7
ぼんやりと過ごす時間が多い	61.9%	2.4	7.2				7.1						6.0		7.1
良い影響を受ける教職員に出会えた	49.3%	-0.2		7.8	-14.6					-10.9					
自分の学部に誇りをもっている	51.4%	0.7			-8.9	6.6	-6.2								7.8
自分の学部出身者は社会に有利	52.8%	3.6		7.9		8.5		5.1						8.4	5.9
自分の学部は今後益々評価される	45.3%	1.9		7.6		5.5									-6.5
日大生であることに誇りをもっている	44.9%	2.0				6.4								6.8	-5.4
日大出身者は社会に有利	49.6%	2.7				9.6		5.2						10.3	7.9
日大は今後益々評価される	39.9%	1.4		6.2		5.4									-6.7
自分の身内を入れたい	25.0%	4.2	9.2	11.5		11.6								6.6	8.3
自分の才能を伸ばしてくれる	42.6%	3.3	7.3	7.0	-6.6	10.6		8.5						10.4	
日大スポーツの活躍は誇りだ	52.0%	-0.9													-9.4
日大スポーツの応援に行った	20.8%	2.8	10.2	11.1		5.3								-5.9	7.0
日大スポーツの情報欲しい	35.4%	-0.1				5.8								-6.1	
日大スポーツを見に行きたい	40.8%	1.3						5.1							7.1
日本大学新聞を読んでいる	16.3%	4.1	8.7	14.5		6.5	-5.0							6.5	5.6
学部の機関誌を読んでいる	17.3%	1.7		11.3											
校歌の歌詞を見ないで歌える	20.6%	5.4	8.0	15.4	12.0	5.0								6.1	9.8
日大HPをよく見ている	31.3%	4.1	6.8	13.2	-6.3	15.4								5.6	12.5
学部のHPをよく見ている	60.6%	12.6		23.9	6.2	26.9	-12.7							16.0	21.5
学部長名を知っている	37.3%	2.7		9.8	6.2		-8.4	7.0						7.4	-9.7
学長（総長）名を知っている	33.7%	12.6	23.6	19.1		14.6		16.4						7.5	10.9
学祖名を知っている	58.3%	-0.9	-10.0			-6.8	-18.9	16.3						12.7	-12.0

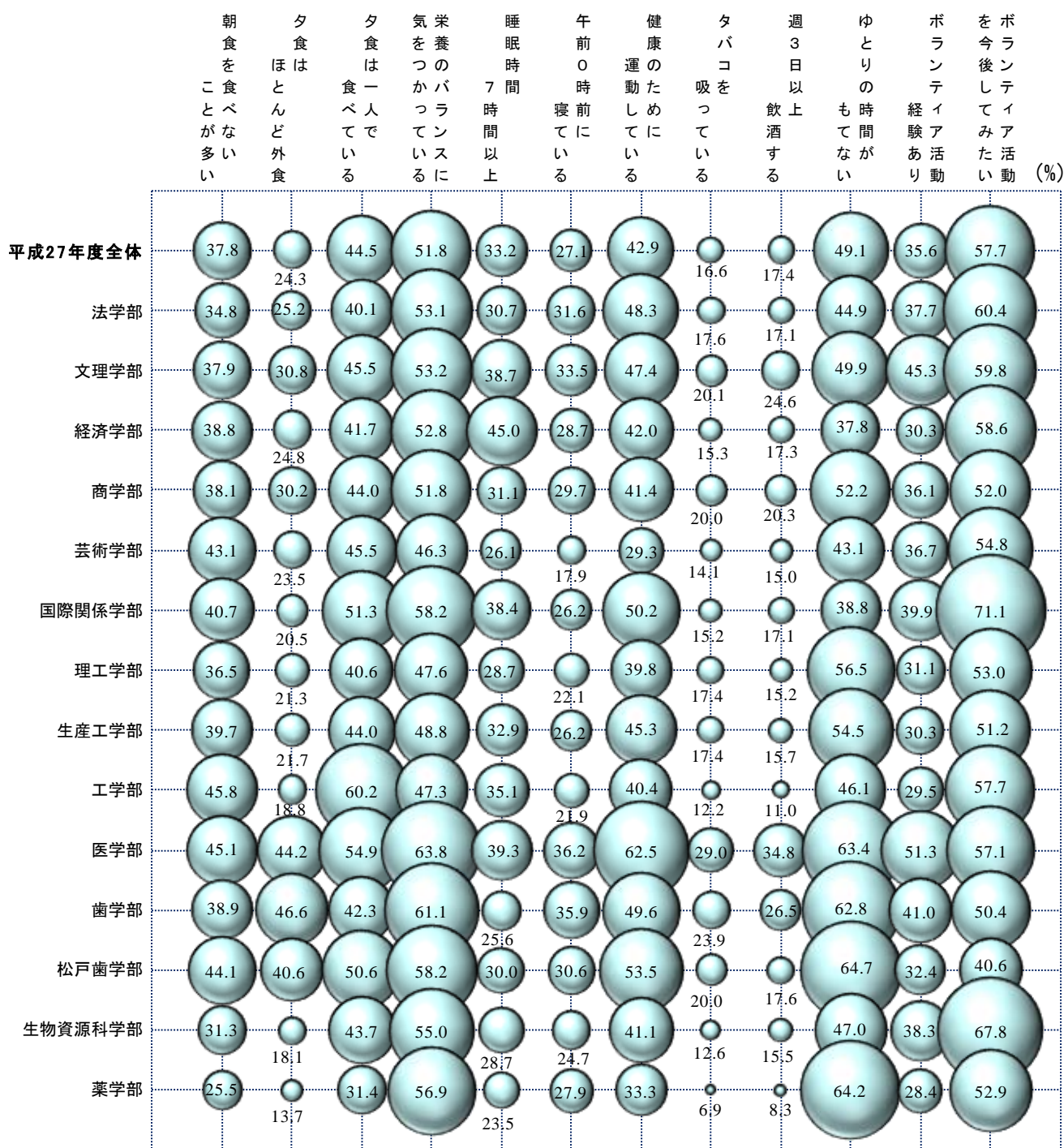
(注)学部別は、増減が5ポイント未満は非表示。

8.日常生活及び個人活動

栄養のバランスを考えた食事，健康のための運動等健康に留意している学生は約半数。
勉学等で「ゆとりの時間がもてない」学生が半数。

全体で見ると，食事に関して「栄養のバランスに気をつけている」がほぼ半数（51.8%），「健康のために運動している」は半数弱（42.9%）となっており，学生の約半数は健康に留意しているようです。一方で，「朝食を食べないことが多い」が4割弱（37.8%），また「睡眠時間7時間以上」と「午前0時前に寝ている」は30%前後にとどまっています。「（授業のための勉学やレポート作成などのために）ゆとりの時間がもてない」もほぼ半数（49.1%）となっていますので，勉学に忙しい学生生活を送っている学生が多いようです。また，「ボランティア活動を今後してみたい」学生は57.7%，国際関係学部・生物資源科学部で高くなっています。

図7-8 日常生活及び個人活動(平成27年度全体・学部別)



9.日常生活及び個人活動の経年変化—その1

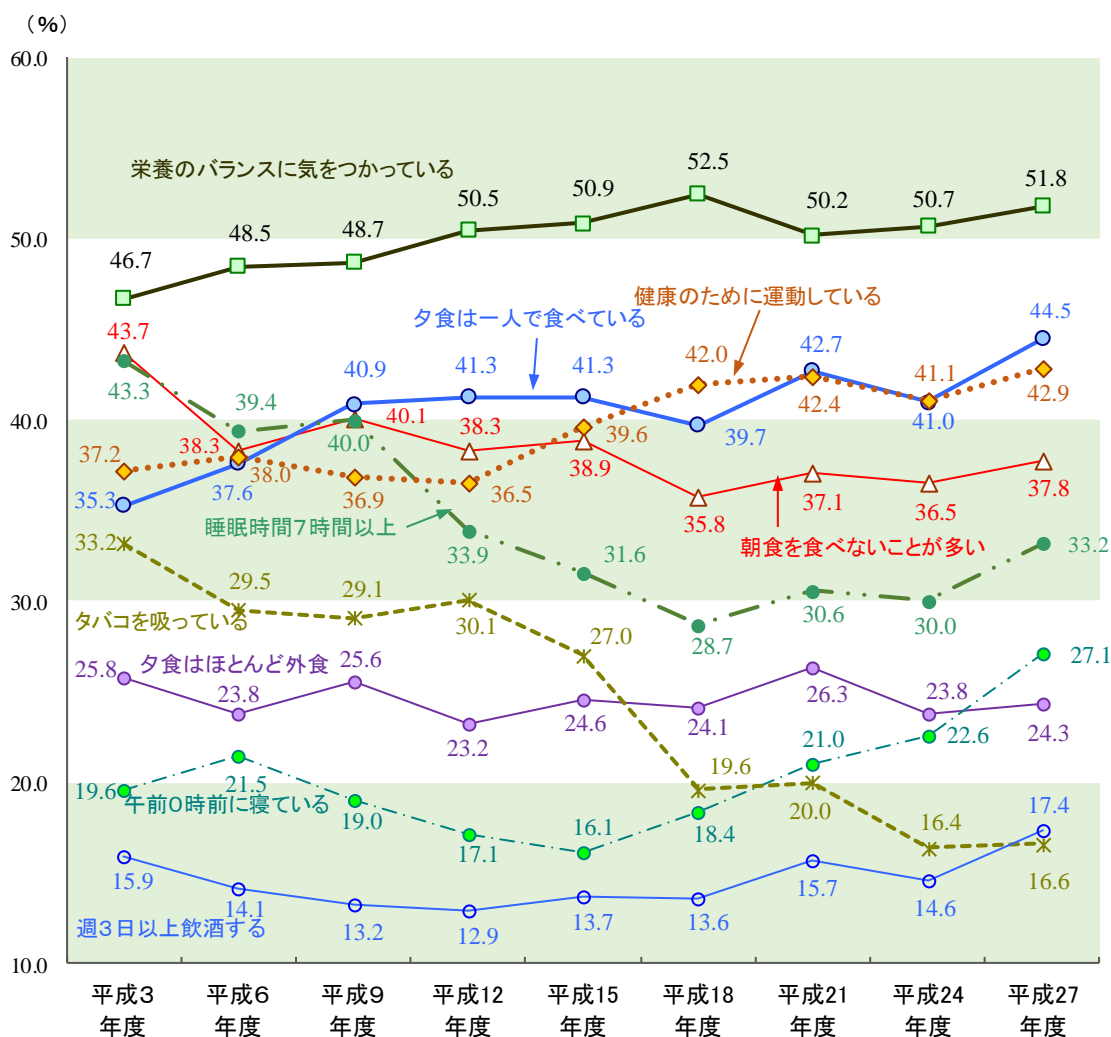
健康志向が長期間で徐々に向上、近年睡眠も改善方向。
タバコ離れが一服、飲酒が漸増。

学生の日常生活及び個人活動について平成3年度からの経年変化を見ると、「栄養のバランスに気がつかっている」は24年間で5.1ポイント増、「健康のために運動している」も同期間に5.7ポイント増、一方で「朝食を食べないことが多い」は同期間に5.9ポイント減となっており、長いレンジで見ると健康管理についての態度が向上しているようです。また、「夕食は一人で食べている」学生の比率も同期間に9.2ポイント増加しています。

睡眠について同期間の変化を見ると、「睡眠時間7時間以上」が10.1ポイント減となっていますが、直近の9年間では増加に転じています（4.5ポイント増）。「午前0時前に寝ている」も直近の9年間に8.7ポイント増加しており、学生の睡眠は改善方向にあるようです。

また、「タバコを吸っている」は平成24年度までの21年間で16.8ポイント減、この3年間は横這い、「週3日以上飲酒する」は平成12年から漸増傾向で15年間で4.5ポイント増となっています。

図7-9-1 日常生活及び個人活動の経年変化(全体)—その1



9. 日常生活及び個人活動の経年変化—その2

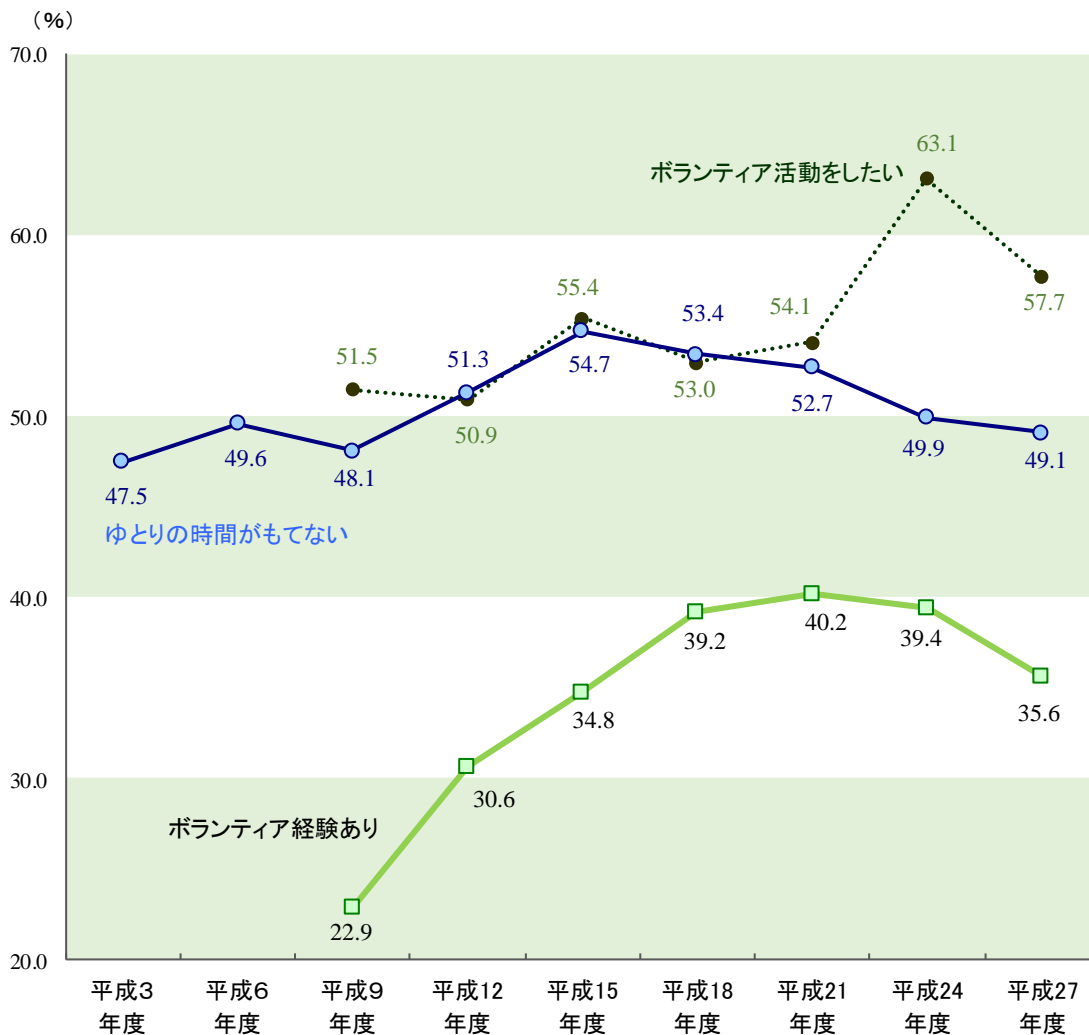
ゆとりの時間がもてない学生は12年前より減少傾向続く。授業改善の効果？
ボランティア熱がやや下降し。

ゆとりについての経年変化を見ると、「（授業のための勉強やレポート作成などのために）ゆとりの時間がもてない」学生が平成3年度から平成15年度の12年間で47.5%から54.7%と7.2ポイント増加しましたが、平成27年度は49.1%と、平成15年度からの12年間で5.6ポイント減少しています。

学部別に見ると、「ゆとりの時間がもてない」学生は、工学部・生産工学部・国際関係学部・経済学部・歯学部では平成15年度から12年間で10ポイント以上減少しています。例えば、生産工学部では平成15年度から学生に対して『授業評価アンケート』を実施し、教員が教育効果を勘案し授業改善に取り組んでいます。他の学部でも同様の取り組みを通して授業方法の改善等の取り組みがなされた結果、学生のゆとりが改善されてきていると推測できます。

平成7年1月17日の阪神淡路大震災を機にボランティア活動が国民に広く浸透してきたようですが、平成9年度に「ボランティア活動をしたい」とした学生は51.5%でした。その後漸増傾向を示し、東日本大震災（平成23年3月11日）直後には63.1%に達しました。その後3年後である平成27年度は5.4ポイント減少し57.7%となっています。ボランティア活動の経験率は、平成9年度の22.9%から平成21年度の40.2%まで上昇し、その後東日本大震災がありました。減少傾向となりました。ボランティアを行動に移すのは学生にとっても容易ではなさそうです。

図7-9-2 日常生活及び個人活動の経年変化(全体)—その2



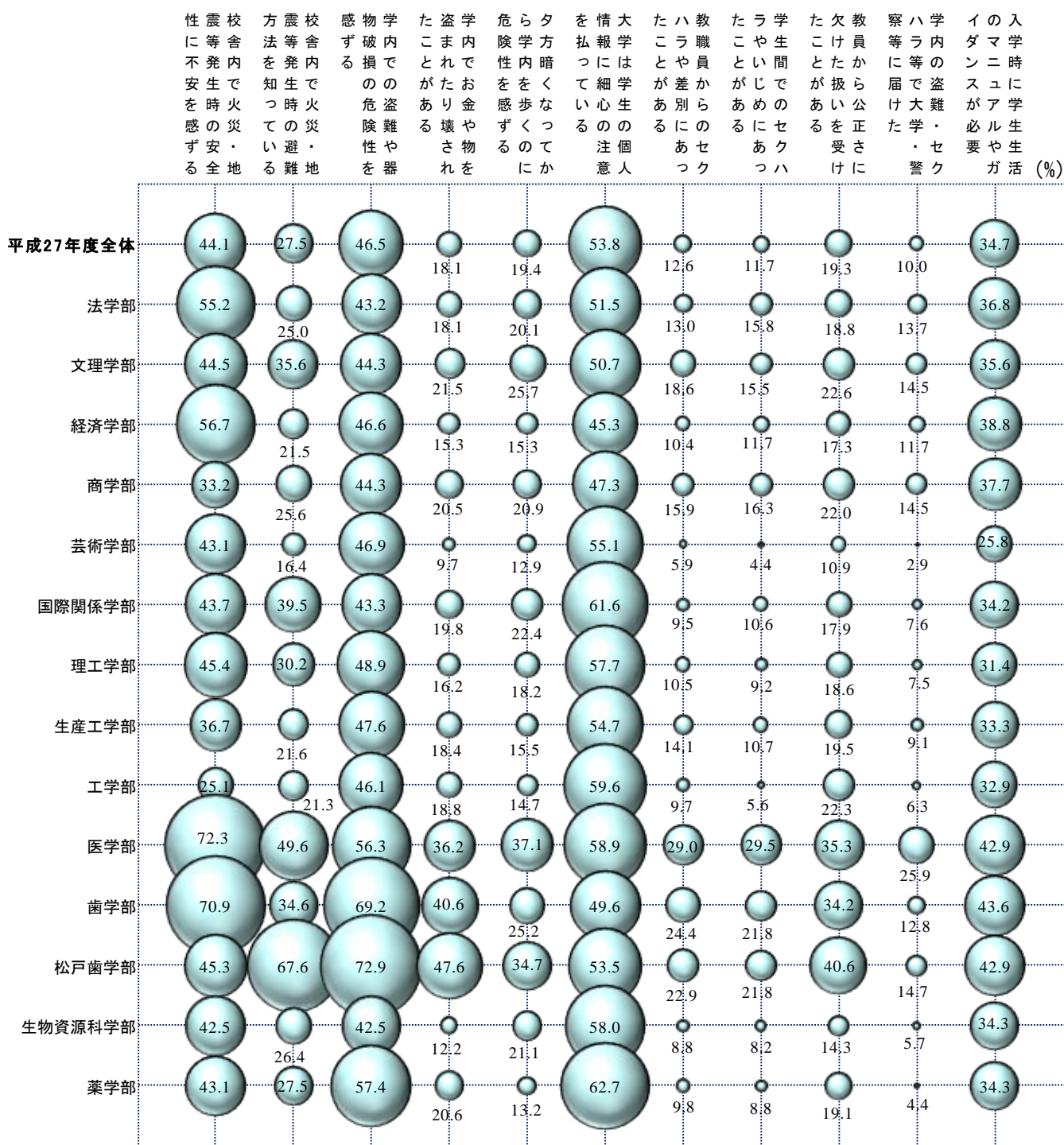
10.安心できる大学環境

本学の個人情報保護に対し、53.8%の学生が評価。

「災害時の安全性に不安」の44.1%に対し「避難方法を認知」は27.5%、学部間の差が大。

全体で見ると、マイナンバー制度の導入など個人情報に対する関心が高まる中、「大学は学生の個人情報に細心の注意を払っている」とする学生が53.8%と高くなっています。安全面では、「校舎内で火災・地震等が発生した時の安全性に不安を感じる」学生が44.1%いる一方、「避難方法を知っている」学生は27.5%にとどまっています。災害時の安全については学部間のバラつきが大きく、学部ごとの対応の必要性を示しているようです。「学内での盗難や器物破損の危険性を感じる」は全体で46.5%、医歯系学部で高くなっています。

図7-10 安心できる大学環境(平成27年度全体・学部別)



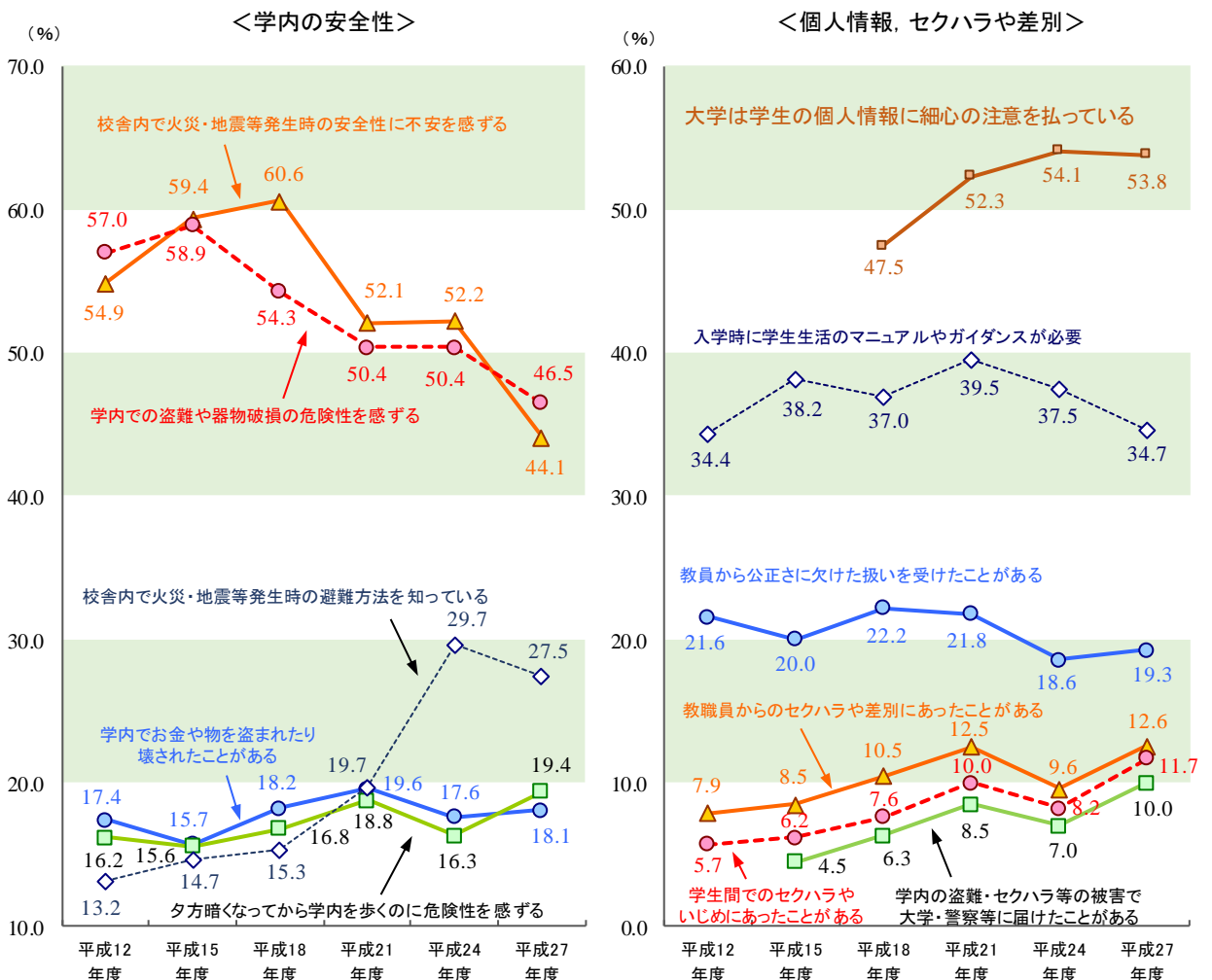
11.安心できる大学環境の経年変化

校舎内での災害時の安全性に不安を感じる学生が近年大幅減。盗難等の危険性も減。
多数の学部での校舎新設・耐震工事の進捗による効果！

学内の安全性について、この項目が調査に含まれた平成12年度からの経年変化を見ると、「校舎内で火災・地震等発生時の安全性に不安を感じる」学生は平成18年度の60.6%から平成27年度の44.1%まで9年間に16.5ポイントも減少しました。学部ごとに直近の9年間の変化を見ると、全学部で減少、特に商学部では39.7ポイントの大幅減、薬学部・芸術学部・国際関係学部・文理学部で約20ポイント減となっており、多数の学部で校舎の新設や耐震工事が着々と進んでいる成果が表れているようです。また、「学内での盗難や器物損壊の危険性を感じる」学生も平成15年度の58.9%から12年間で12.4ポイント減少して46.5%になっています。校舎など学内整備は学生の安全面にも寄与していることがうかがえます。一方、「避難方法を知っている」学生は直近の3年間で2.2ポイント減少しており、学生に対する危機管理体制強化の継続が期待されます。

個人情報について見ると、「大学は学生の個人情報に細心の注意を払っている」は平成18年度の47.5%から平成24年度の54.1%まで年々増加していましたが、直近の3年間はわずかに減少しています。これは学生側の意識ですが、個人情報の流出などが社会問題となる昨今、情報管理体制と学生への告知について考えさせられるデータと言えるかもしれません。

図7-11 安心できる大学環境の経年変化



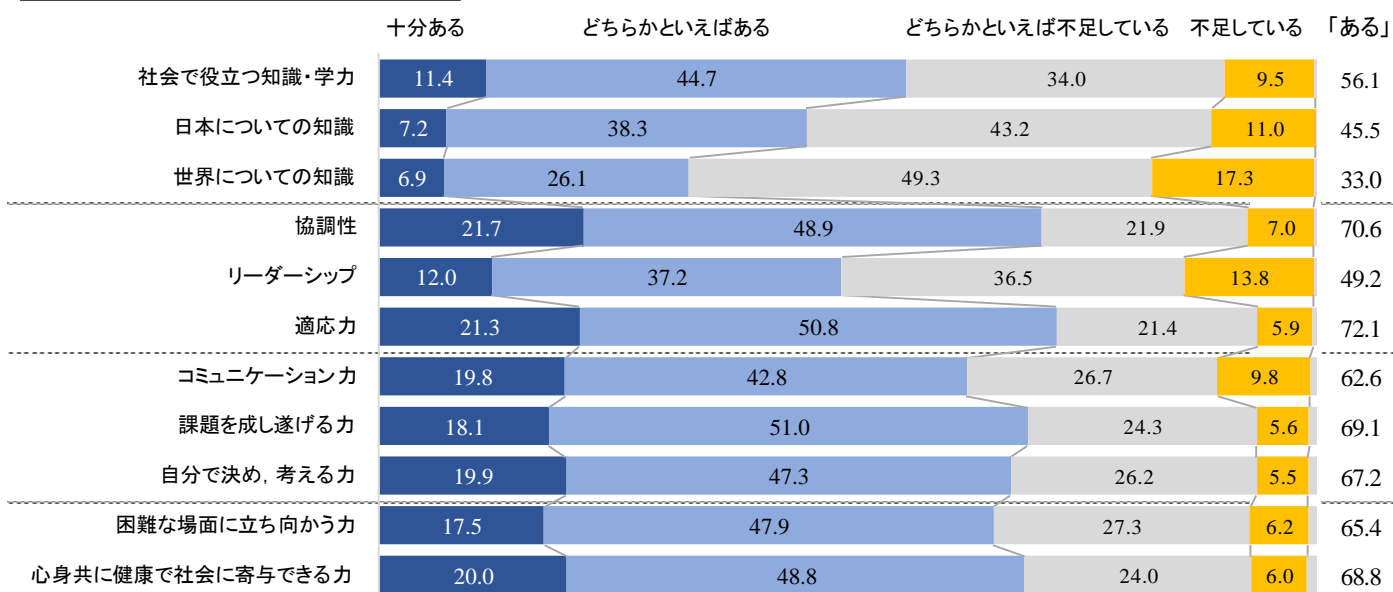
12.身についている力

本学学生は、「適応力」「協調性」「課題を成し遂げる力」に強いが、幅広い知識やリーダーシップ、学部間の差が課題？

平成27年度の調査で、「次のような力がどの程度身についていると思いますか」という設問が追加されました。これは、本学が推進している「自主創造」の教育理念に対応すると思われ、自主創造力と言えます。全体で見ると、ある(「十分ある」と「どちらかといえばある」の合計)と答えた比率は、「適応力」(72.1%)「協調性」(70.6%)が高く、ついで「課題を成し遂げる力」(69.1%)「心身共に健康で社会に寄与できる力」(68.8%)と高くなっているのに対し、「世界についての知識」(33.0%)「日本についての知識」(45.5%)「リーダーシップ」(49.2%)は半数を割っています。

学部別に見ると、「協調性」「適応力」は全学部で70%前後と高くなっていますが、「日本についての知識」,「社会で役立つ知識・学力」,「世界についての知識」では、最高の学部と最低の学部との差が31.9~34.4ポイントあり、学部間のバラつきが大きいようです。

図7-12 身についている力(平成27年度全体)



(注) 「ある」は「十分ある」と「どちらかといえばある」の%の合計 (%)

表7-12 身についている力(学部別)

	法	文理	経済	商	芸術	国際関係	理工	生産工	工	医	歯	松戸歯	生物資源	薬
社会で役立つ知識・学力	52.8	65.3	59.6	56.2	53.3	57.0	56.0	56.0	50.8	78.1	62.4	60.0	45.8	54.4
日本についての知識	53.3	53.2	47.9	50.8	38.8	43.7	42.1	46.6	41.7	63.8	48.3	47.1	33.0	29.4
世界についての知識	37.6	42.8	35.5	39.7	25.5	36.1	27.8	32.3	25.1	54.5	39.3	41.8	22.6	22.6
協調性	69.1	71.9	69.1	68.5	71.3	74.9	68.5	71.4	70.9	78.6	73.9	71.2	71.3	73.5
リーダーシップ	49.1	57.1	48.8	49.1	49.0	52.8	45.8	49.5	45.1	69.2	56.4	51.2	43.4	42.7
適応力	70.2	71.2	72.3	67.4	73.0	73.0	75.5	74.0	70.8	78.5	70.5	74.1	71.7	69.6
コミュニケーション力	59.0	67.7	63.2	60.8	65.1	69.6	59.1	66.4	60.2	74.1	69.2	70.6	57.3	59.8
課題を成し遂げる力	67.3	71.0	67.4	65.6	69.2	75.7	69.4	72.7	70.2	74.1	70.5	71.2	65.7	67.6
自分で決め、考える力	65.5	65.6	69.4	63.9	75.0	74.9	66.0	68.2	64.3	75.9	65.4	70.0	65.7	63.2
困難な場面に立ち向かう力	65.7	69.6	63.5	62.3	68.6	72.3	63.5	68.2	60.9	75.0	64.5	68.3	61.7	66.2
心身共に健康で社会に寄与できる力	66.6	69.8	70.0	65.6	63.0	77.6	66.1	73.9	67.4	75.5	65.8	67.0	70.8	69.1

(注) ある (十分ある+どちらかといえばある) の%

70%以上

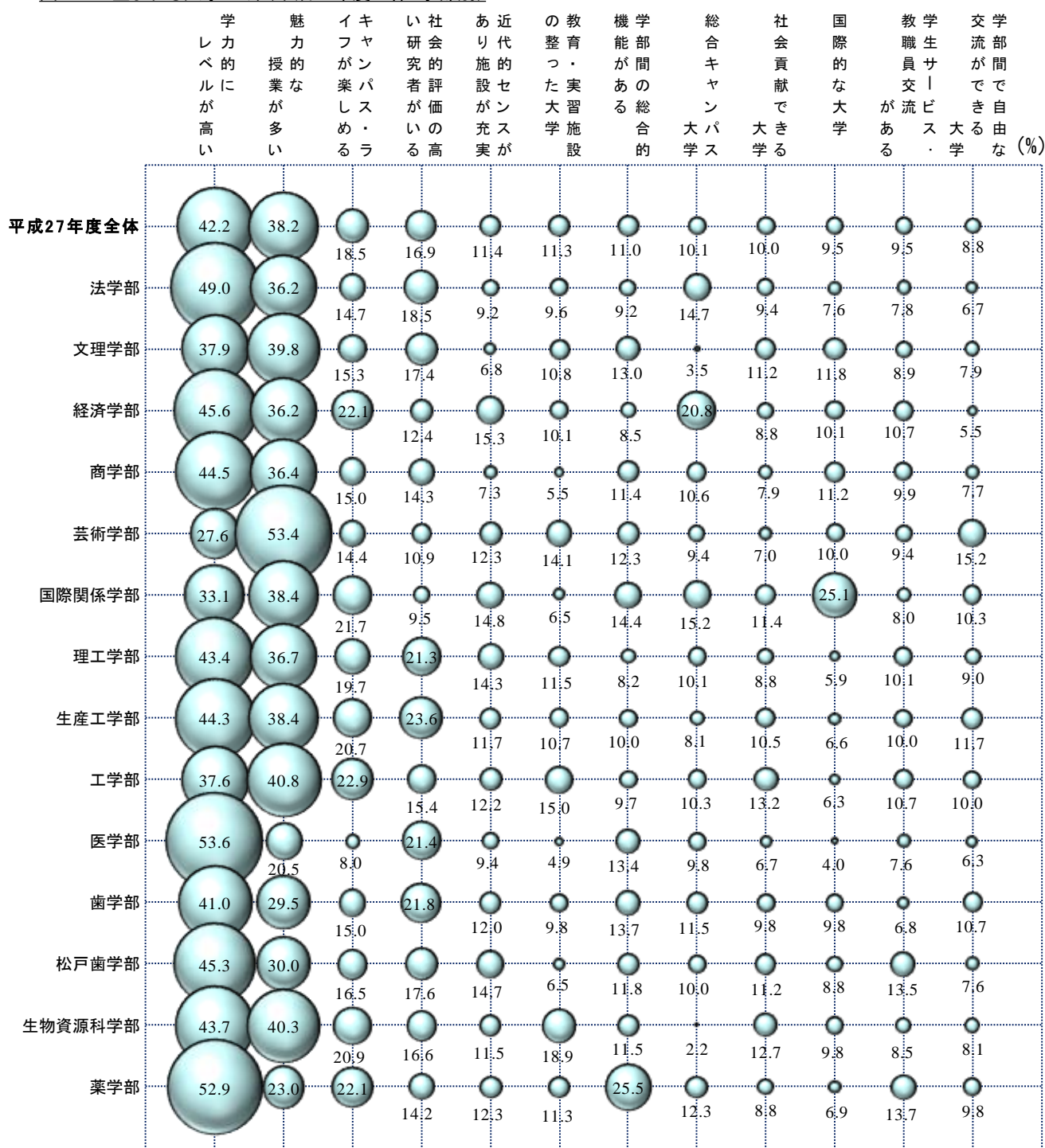
30%以下

13.望まれる大学づくり

魅力ある誇れる大学にするためには「学力レベルの高さ」と「魅力的な授業の多さ」が重要。
施設・アミューズメント面の充実より『勉学面のレベルアップ』。

日大を魅力ある誇れる大学にするために特に重要な政策についての学生の回答を全体で見ると、「学力的にレベルが高い」(42.2%)と「魅力的な授業が多い」(38.2%)が高くなっています。「キャンパス・ライフが楽しめる」「社会的評価の高い研究者がいる」は20%弱、「近代的センスがあり施設が充実」「教育・実習施設の整った大学」、本学の規模を活かした「学部間の総合的機能」「総合キャンパス」が10%強となっており、施設やアミューズメント面の充実より『勉学面のレベルアップ』が重要だと考える学生が多いことが分かります。

図7-13 望まれる大学づくり(平成27年度全体・学部別)



14.望まれる大学づくりの経年変化

魅力ある誇れる大学にするためには『学力的レベルアップ』が重要とする傾向が年々強まる。大学全入時代に入り大学間の競争が激化する中、本学学生からの生きた提言。

日大を魅力ある誇れる大学にするために特に重要な政策についての学生の回答を平成6年度から経年変化で見ると、「学力的にレベルが高い」は平成24年度まで年々大幅増加しており、直近の3年間ではやや減少しているものの、平成21年度からトップを継続しています。「魅力的な授業が多い」は平成12年度から概ね漸減傾向が続いています。「キャンパス・ライフが楽しめる」と「総合キャンパス大学」は平成9年度から概ね漸減傾向にあります。また、平成19年、現在の社会状況に即応しかつ本学の総合性を発揮することを目的として、本学の教育の理念と目的が『自主創造』とされましたが、「学生の自主性を重んじる」という回答は平成6年度の17.6%から平成27年度の7.9%まで21年間で9.7ポイント減少しており、本学と学生の重視点の乖離傾向は継続しています。

少子化により大学全入時代に入り大学間の競争がますます激化していく中、本学がさらに魅力を高めていくために必要な施策として、『学力的レベルアップ』は本学学生からの生きた提言と言えるでしょう。

図7-14 望まれる大学づくり — 主なものの経年変化(全体)

